

奥山廃寺の調査(飛鳥藤原第211-6次)

奥山廃寺は、山田寺の西約800mの奥山集落内に存在した古代寺院です。現在は、浄土宗久米寺があり、一般に「奥山久米寺」と呼ばれてきましたが、「久米寺」という寺名がいつまで遡るかは、定かではありません。伽藍配置は、集落各所におけるこれまでの調査成果から、塔・金堂・講堂が南北に直線上に並ぶ四天王寺式であったことがほぼ確定しています。奥山廃寺の主要堂宇については、東西幅23.4m、南北幅約19mに復元される金堂基壇が注目されます。これは、山田寺金堂を上回り、川原寺中金堂に匹敵する大きさで、飛鳥時代の寺院の中でも第一級の規模を誇ります。ただ、これほどの大寺院であったにも関わらず、文献史料には確実な記述がなく、今も多くの謎を秘めた寺院です。

今回の発掘調査は、個人住宅の建て替えにともなうもので、調査面積は26㎡です。調査区の位置は、塔跡から南東へ約50mの地点で、塔や金堂を囲む回廊の東南隅から15mほど東にあたると考えられます。調査の結果、残念ながら、奥山廃寺に関わる遺構を確認することはできず、また、出土遺物の量も多くはありませんでした。このような調査成果は、調査区全体が後世の削平を受けていたことも一因ですが、当初の推定どおり、本調査地が、奥山廃寺の主要伽藍を構成する建物からは距離があったことを示すものともいえます。今後も今回のような小さな調査を積み重ねることで、寺院の当時の姿をあきらかにしていきたいと思います。

(都城発掘調査部 若杉 智宏)



調査区全景(西から)

古代但馬の出土文字資料集成刊行

但馬は、現在の兵庫県北部地域にあたります。その中央を、円山川が中国山地の雪解け水を集めてゆっくりと北流し、城崎温泉のすぐ東で日本海へ注ぎます。この豊かな流れは、ときに洪水を引き起こすこともありました。穀倉地帯の源となり、コウノトリやオオサンショウウオを育み、さらに地下の木簡を守る自然の恵みともなりました。

自然豊かな但馬は、全国屈指の古代出土文字資料の宝庫でもあります。1977年、但馬国分寺跡ではじめて木簡が出土して以来、史料調査室(現史料研究室)は、地元の依頼をうけて、釈読に協力してきました。平安時代の国府跡とみられる^{にょうがもり}祢布ヶ森遺跡(豊岡市日高町)、出石郡家に関わる^{はかど}袴狭遺跡群(同出石町)等から続々と文字資料が出土し、但馬の出土文字資料は、木簡426点、墨書土器1279点、漆紙^{うるしがみ}文書3点を数えます。国府・郡家・国分寺という地方の三大拠点すべてから木簡が出土している国は、日本中をみわたしても但馬しかありません。

類いまれなるこれらの資料をまとめたという、地元からの強い要望がありました。そこで、都城出土の古代但馬国関係木簡を含め、最新の赤外カメラを駆使した高精細撮影と全点の悉皆再釈読を柱とした連携研究を、飛鳥・藤原地区が中心となって豊岡市立歴史博物館、兵庫県立考古博物館と進め、このほど、『古代但馬国関係出土文字資料集成』を上梓しました。45年にわたる継続した調査研究と、発掘調査から遺物の保存や活用までに尽力されてきた多くの方々のご協力の賜物です。幸い本書は増刷が認められ、少数ながら頒布の予定です。篤学の士の手に届き、広く活用されることを願います。

(都城発掘調査部 山本 崇)



豊岡市祢布ヶ森遺跡出土漆紙文書の調査風景